

女性議員はどうすれば増えるのか

連載 第26回

女性が元気なまち、 人口増加が続く花のまちで 初の女性議長誕生

はせ ふみこ
長谷 文子 北海道恵庭市議会議員

プロフィール

1954年、北海道滝川市生まれ。生後1歳で室蘭市へ移住。高校卒業後、ハワイ大学へ語学短期留学。2007年、恵庭市議会議員初当選、現在5期目。2017年、市議会副議長に就任。2023年、市議会議長就任。同居家族、夫、チワワ犬。



Key Points

- 父親の姿を思い、政治の世界へ
- 53歳で立候補、市議会議員として16年間活動
- 特別委員会設置を主導し議会改革を進める

このたび投稿依頼をいただいたときは、「私は何を書けば？」と非常に戸惑いましたが、これまでの自分の考えや生き方を振り返り、次代に続く、特に女性議員へのエールになればとの思いでお受けすることにいたしました。

自由奔放な若き日々

私は、昭和29年（1954）、開業医の父と、優しい母の次女として生を受け、高校卒業までは室蘭市で何不自由ない暮らしを謳歌する、わがままな撥ねつ返りの強い娘であったと思います。

高校3年のときに、父の理念でもある、「できるときにできることをやれ」とか、「これまででの常識がこれからの常識と思うな」等の教えがきっかけで、18歳になった時点で早くも普通免許を取得。当時部活動中に骨折しギブスをつけていたことを理由に、父所有のオートマチックの自家用車（片足

でも運転可能でした）で登校し、担任から指導を受けました。当時、免許取得禁止や自家用車通学禁止の校則などはありません。担任にそのことを指摘し、食ってかかったものでした。

その後、大学進学を選択肢もありましたが、まわりのみんなと同じことをするのつまらないと考え、ハワイ大学の聴講生として短期留学を経験させてもらいました。今思い出しても恥ずかしいと感じることを、平気で実行していた娘でした。

28歳のときに尊敬していた父が亡くなり、数年後に縁があつて恵庭市へ移り住みました。

転居後、現在に至る一つのきっかけともなる出来事がありました。「国際ソロプチミスト恵庭」の会員になったことです。この「国際ソロプチミスト」とは女性だけで構成された世界的な組織で、主に女性の地位向上をめざし



恵庭市議会の議長席の筆者

て活動する団体です。私は、この団体での活動を通して教育や文化、児童および青少年の健全育成、さらに男女共同参画社会の推進などの実態に触れました。そのことで、今思えば議会人としての活動に不可欠な事項を学ぶことができたと思います。貴重な体験をいただいたことに感謝しています。

突然の立候補から議員へ

平成19年(2007)2月頃、自民党恵庭支部の役員の方から、唐突に「市議会議員選挙に立候補していただけないか」との話がありました。「何故私なのか?」——明確な答えが見いだせないまま、時間のない中で立候補することになったと記憶しています。

そのときの後援会体制は女性が多数を占めており、支援団体は町内の老人クラブの有志の方たちが中心でした。右も左もわからない私を全力で応援してくれた支持者の方々には、いまだに頭が下がります。当時年齢53歳、人前ではつきりものを言うことだけが取り柄の女性議員が誕生しました。今にして思えば、この世界に飛び込む理由がなかったわけ

ではありません。亡き父も開業医の傍ら政治や選挙に非常に関心が高かったのです。議員選挙や首長選挙に体を張って取り組む姿を、小学生の頃から見てきたのでした。

そのようなわけで、母などが私が市議会議員になったのを驚くことなく、自然に受け入れてくれました。ありがたいことでした。

新人議員の頃

初当選の頃は、まだ女性議員が少ない時代でした。恵庭市においても議員全24名中2名、所属党派の中では12名中1名という、まさに男性社会の中だったのです。しかもまわりは先輩議員が多い中、あまりしゃべらずおとなしい議員だったように思います。

ただ一点、当選後初めての会議の最後、その他の意見を言える場で、「人の分のお茶くみや茶碗洗いは一切やりません。自分の方は自分でやりください」宣言を勇気を出して行いました。冷や汗をかきながらこの「宣言」は忘れられないことです。

その後、時は移り、今年の統一

地方選挙では21名中7名の女性議員が誕生しました。嬉しい限りです。

6年前に副議長就任

地域の活動もこなしながら、議会では主に子ども・女性・高齢者に関する諸課題についての活動を担当しました。そのような中、6年前に副議長を拝命することとなり、ベテラン議長の下、さまざまなことを学び、非常に充実した2年間を過ごすことができました。この体験が、このたび私が議長を担うことになった理由の一つになっているのかもしれない。

恵庭市のこと

恵庭市は人口が伸びている数少ない市です。全国的に見ても珍しいことでしょう。立地や環境が奏功し、宅地開発するたびにすぐに買い手がつくというありがたい状況です。

「花のまち恵庭」と言われるようになったのは、昔から在住する一部市民が自宅の庭に丹精込めて植えた花を一般公開するようになったことがきっかけでした。令和



「~ガーデンフェスタ恵庭 2023 ~第 34 回恵庭花とくらし展」にてテープカットを行う筆者（右から2人目）

4年（2022）6月に開催された「第39回全国都市緑化フェア2022」で、道内外から多数の来場者に来ていただき、大成功を収めました。このフェアの開催に向け、誰もが認めたことは、恵庭の「市民力」のすごさでした。市民がみんなで「ウェルカム」の気持

ちを込めて準備している姿は、郷土愛に溢れていました。きっと誰もが自分たちのまちのことを考え、今以上に美しく住みやすくしようとの思いを強くしていたのではないのでしょうか。このときの市民の行動もその思いの現れだったでしょう。

また、恵庭市は議会改革が進んでいるまちだと自負しており、今後の配慮が盛り込まれています。また、「議場コンサート」や「議会見学ツアー」なども実施しており、それらの参加者に女性は少なくありません。

そんなまちなので、自主的で元気な女性も多く、今回の市議選での女性議員の人数は7名と過去最高になりました。その理由のひとつには「女性が元氣」なことにあるのでは、と推察しています。

いよいよ議長に

この春から、新人議員6名が加わり新たな恵庭市議会がスタートしました。私にとつては、子どもの年齢くらいの議員も増えました。平均年齢が下がり、優秀な方たちぞろいの議員メンバーの中で私の立ち位置を考え、これまでと同じように振る舞うのではなく、今まで過ごしてきた16年間の議員生活の中で培ってきたことを活かしてみたいと思いました。決して良いサンプルではないかもしれないけれど、女性議員の一

歩前に行く、そんな存在になれればとの思いで議長選挙に立候補をしました。結果、21名中20名の賛同をいただき議長に就任することができたのです。この結果を重く受け止め、これからの2年間をしっかりとやっていこうと強く決意しました。

まず初めに、私が議員になりたての頃、議長室へ入るのは非常な勇気の要ることで、めったなことでは入ることがありませんでしたが、今は私が在室の際、余程のことがない限り議長室のドアは開けたままの状態にしています。市民・職員・議員と気軽に話ができるように、と考えたためです。

恵庭市には多数の自治体から行政視察の依頼があります。最近では昨年開催された「緑化フェア」に因^{ちな}んだ内容の視察も多く、観光に力を入れ始めた本市なので、出来る限り出向き挨拶をし、私なりに「花のまち恵庭」のPRに努めています。

二つの特別委員会設置を推進

残念なことに、昨年10月に同僚



恵庭市議会のメンバー（前列中央が筆者）

議員のパワハラ問題がマスコミで取り上げられ、恵庭市議会の信用が一気に失墜しました。これを重く受け、同月「恵庭市議会ハラス

メント根絶条例」を制定したところですが。今年9月定例会において、今後二度と起きないようにとの思い

と、内容のより一層の深化を図るため、「恵庭市議会ハラスメント根絶特別委員会」を設置しました。

さらに、「議会改革特別委員会」も同時に設置することにいたしました。社会状況が変化することにより、タイムリーな議論ができるように、との考えからです。市民への発信の仕方を変えたりする必要もあり、活発な委員会になることを期待しています。

また、議会基本条例を早期に制定することも大切で、女性目線で大いに盛り込んだ内容で実施できればと思います。

女性議員はどうすれば増えるのか

さて、このたび寄稿依頼があった連載シリーズのメインテーマについてですが、女性議員をすぐに増やすことは難しいと感じます。私が議員になった頃は、女性であるという物珍しさから立候補しさえすれば比較的当選しやすいという時代であったかもしれませんが、今は違います。クオータ制（議会における男女間格差是正のた

め、議席の一定数を女性に割り当てる制度）など、さまざまな議論がされ、政治分野における女性議員の確保に苦慮していますが、私はまず第一に家族の協力と理解、さらに女性が地域の課題についての問題意識を持つことと、地元への愛情が何よりの強みだと考えます。前段でも少し触れましたが、恵庭市の女性はこのことには敏感で、これが今回の選挙結果に繋がったのではないかと考えています。

私が、議長になるまでのことを書かせていただきました。後に続く女性へのエールになるのであれば幸いです。

女性が特別視されない社会へ

最後に、このたびの議長就任に際し、インタビューや寄稿の依頼が数件ありました。これらのほとんどは私が「女性だから」という理由からのものです。異論を唱えるつもりはありませんが、一日も早く特別視されることがなくなる社会になることを願います。私からのメッセージといたします。